コスタリカ・プロジェクト

日詰明男
写真撮影：二宮知子

真の国際交流をすすめるには、「講師／参加者」という硬直した図式ではどうしても限界がある。
ひとつの目的へ向けて地元の方々と長期間の共同作業をする過程で、予期しない出来事に遭遇したり、問題の解決に必死で当たったりする中で、喜怒哀楽や達成感を共有し、おのずと揺るがぬ信頼が形成される。これこそ何よりの国際交流であろう。葛藤を伴わない人間関係は空疎で儀礼的なものに終わりがちである。
今回の建築ワークショップはその意味で理想的な国際交流の場になったと思う。
できるだけ生の体験に近づけるべく、この事業報告書を自由形式で書きたいと思う。

[8月13日—14日]
アトランタで乗り継ぎ、およそ 20 数時間かけてコスタリカの首都サンホセに着いた。時刻は午後8時。
その日は市内に一泊せざるをえず、次の日の早朝、ローカル航空会社の小型プロペラ機（12人乗り）に乗り込み、プエルト・ヒメネスへと向かった。
コックピットは丸見えの、なかなかスリリングな乗り物だった。命を預けているなあと実感できる。

プエルト・ヒメネス空港

機長の脇には女性操縦士が座り、今回の飛行は彼女のトレーニングの機会でもあったようだ。着陸は彼女が担当した。
多少スラロームしながらも墓地に隣接した未舗装の滑走路に無事着陸した。

プエルト・ヒメネス市街

プエルト・ヒメネスは小さな町である。10 分も歩けば町の外に出てしまう。
海抜数メートルそこそこ。
時刻は正午。太陽はほぼ真上にあり、かなり暑い。
今回のプロジェクトのディレクター、スティーヴ・ベルがホンダ製四輪駆動バイクで迎えに来てくれた。
私たちの膨大な荷物を見た彼は、乗り合いトラック（コレクティーボという）を貸し切りタクシーとして手配してくれた。およそ40分、無舗装の道路を激しく揺られながらひた走り、ようやくスティーヴの家に着いた。
長旅の疲れは極限に達しており、その日は泥のように眠った。

Akio Hizume “Costa Rica Project”

[8 月 15 日—21 日]

●マタパロ

オサ半島全域地図

スティーヴの家はオサ半島のほぼ南端に位置する「マタパロ」という地域にあり、コルコバード国立公園の外とはいえ、歴とした手付かずの熱帯雨林の真っ只中である。

マタパロ

「マタパロ」とは、ある蔓性植物の名前であり、「木を殺す植物」という意味だという。実際にスティーヴの敷地内の森林でその地名の由来となる植物を見た。それはかつて大木に寄生し、その木を絞め殺し、宿主が朽ちて倒れてもなお自分自身は立ち続ける驚くべき蔓性植物だった。写真のように空洞を抱きかかえるように自立している。それはまるで、師匠としての大木の所作をトレースし、その建築力学を手取り足取りで真似び（学び）、最終的に技術を会得した弟子の姿を見るようであった。

スティーヴの家

スティーヴはアメリカとコスタリカを2週間ごとに往復する生活をしている。

コスタリカではフレンド・オブ・ザ・オサというＮＰＯの中心人物として働き、森林保護や、牧場を熱帯雨林に戻す仕事や、竹の建築や手工芸の振興に力を注いでいる。

オサ半島のどこへ行っても顔見知りばかりで、互いに名前を呼び合っている。誰とでもすぐに友達になれるずば抜けた社交性は、若かりし頃の世界放浪で培われたものらしい。

彼は 17 年前、まだ 30 代の時にマタパロを訪れ、30 ヘクタールにおよぶ広大な土地を買い、自力で家を建てた。水は 2km 離れた山から引き、電気は太陽光発電、浄化槽もすべて自前で設置したというから開拓精神たくましい。

ここでは毎朝、日の出前にホエザルのものすごい合唱で起こされ、寝坊などしてはいられない。だから人は午後9時には床に入る。

電波はほとんど届かず、インターネットももちろんつながらない。

スティーヴの家に共生するコウモリ

残飯をねだる猫のような行動様式のピゾーテ

十分な睡眠をとった後、私たちは打ち合わせを開始した。

私たちの活動の候補地はオサ半島の中に数箇所あるようだった。

ひとつは熱帯雨林の中に立つフレンド・オブ・オサの自然科学研究所。

二つ目はフレンド・オブ・オサの事務所があるプエルト・ヒメネス市街。

三つ目はプエルト・ヒメネスから内陸側に向かって 40 分ほどの街、ラ・パルマである。

その他、マタパロ周辺にもいくつか候補地があるようだった。

スティーヴの配慮で、ワークショップ実施の敷地を選定する

目的を兼ねて、私たちはしばらくここを拠点に、オサ半島全域の文化的、自然的背景を視察することにした。事業を開始する前に、知識だけでなく風土を体感しておくことはとりわけ重要なことである。

スティーヴの家にはもう一人、アメリカからの客人ジム・グッドマンがいた。
彼はバングラディシュをはじめ、世界から飢餓をなくす The Hunger Project という運動を続けている。単に物資を送るだけの援助ではなく、貧困に起因する意識の低下がさらに貧困を呼ぶという悪循環を断ち切り、個の自立をめざしたスキルの習得など具体的な戦略を指し示し、サポートする活動をしているそうだ。昨年のノーベル平和賞をとったムハマド・ユヌス氏のグラミン銀行とも密接な関係にあるようだ。

●無垢な自然

マタパロから海岸沿いに奥地へ進むとカラテに至り、そこで公道は終点となる。その先は広大なコルコバード国立公園がひろがる。
プエルト・ヒメネスからカラテまでの公道沿いにはアメリカやヨーロッパからの移住者がぽつりぽつりと住み、瀟洒でエコロジカルなホテル（エコロッジ）がいくつかひっそりと建っている。公道からホテルへ入る私道の入口は、ほとんど目立たないサインがあるのみで、知る人ぞ知るといった風情である。

その中でスティーヴの知り合いが経営する一軒のホテルを見学した。
建物から家具調度品まで徹底して自然の素材にこだわり、滞在客は手付かずの熱帯雨林をそのままの形で満喫できる環境である。

コレクティーボ

プエルト・ヒメネスからこのホテルまでの交通手段は、ピックアップ・トラックの荷台に相乗りするコレクティーボ以外にない。橋のない川を数え切れないほど渡り、早籠に乗っているがごとく上下左右に激しく揺れながら到達するまでに1時間以上はかかるだろう。妊婦には絶対お勧めできない。
そこまでして来ようとする観光客も相当な根性だと思うが、それを受け入れるホテルもよく採算がとれるものである。よほど安定した固定客がいるのだろう。
相応の覚悟あるお客のみを受け入れるという、適度なバリヤとなっているのだろう。熱帯雨林をひやかすだけの観光客は受け入れないということだ。
私は京都の「一見さんお断り」の店を思い出した。
加えて、こうした悪路ではスピードが出せないので、野生動物と自動車の事故が起こることもない。
人間さえ我慢すれば、何事もいい事ずくめというのがこの地球の法則である。

マタパロからカラテにかけての海岸は太平洋に面し、素人目にもサーフィンの絶好の場所に見えるが、海岸でサーファーはおろか泳いでいる人すら見かけなかった。
まったく無垢な海岸があったものである。サーファーにとっては波を独占でき、一度訪れたらたまらないにちがいない。
秘湯ならぬ secret beach である。
当然ゴミもほとんど無い。

マタパロからカラテの海岸

●マタパロの移住者

スティーヴの家の隣、といっても数キロ離れているのだが、そこにドイツ人夫婦が住んでいる。移住して10年になるという。
マークは彫刻家、ニコはヨガやアロマ、ホメオパシーのセラピストである。
独力で竹の独創的な家を建て、スティーヴ同様、水を山から引き、電気は太陽光発電のみでまかなっている。
自作の家とはいえ彫刻家が建てただけあって、創意工夫に満ちていた。床以外には一切木材を使っておらず、すべて竹と椰子だけで統一されている。前述のホテルに比べれば、お金はかかっていないが、こちらの方が完成度は高い。

マークの家でのプレゼンテーション

竹の防虫処理といえば安易な化学処理に走りがちだが、彼はなんと天然の蜜蝋を使っていた。徹底したものである。
広大な熱帯雨林の庭は、極力自然に手を加えないという意図が隅々まで行き渡っており、細い歩道が通されているだけだった。来客用の小ぶりなコテージがひっそりと数件建っている程度である。
夫人のニコは、海外からオサ半島に移住した人々とのネットワークを作っており、熱帯雨林に負担をかけず、しかも自由にのびのびと生活するためのノウハウを共有している。
私は彼女の著書「Living in the Jungle」をいただいた。
一読したが、この本にはまがい物ではないエコロジーの知恵が詰まっている。自然への畏敬の念と徹底した保護の姿勢は地元の人以上に高い。すぐれたサバイバルの書としても読むに耐える。
彼らのライフスタイルはピューリタン的といえるほどの徹底ぶりだが、夫婦そろって芸術家であるだけに窮屈さはなく、余裕が感じられる。
このお宅を訪問して、まるですぐれた総合芸術を見た後のような充実感に圧倒された。

この訪問の際、近隣に住む他の移住者と会ったが、みな広大な敷地を手に入れ、熱帯雨林保護を天職としている人々ばかりであった。
彼らは牧場として使われていた土地を買い、地道に熱帯雨林に戻そうとしている。
コスタリカは国家レベルで自然保護に取り組んでいることで有名だが、こうした意識の高い外国人の移住によって支えられている一面も忘れてはならないと思った。

マーク家の海岸

●リサーチ・センター
スティーヴの家から程近く、マタパロからカラテの間、ピロという所にある、まだ完成して間もないフレンド・オブ・オサの自然科学研究所（リサーチ・センター）を訪れた。
フレンド・オブ・オサは、ここを拠点に、森林保護やウミガメなどの海洋生物の保護を地道に行う傍ら、世界中から自然科学の研究者やアーティストを招き、旅費以外の滞在費用をすべて受け入れる形で研究所を運営している。
ここも今回私たちの活動の候補地のひとつであった。
地元の竹をふんだんに使った研究所の建物は、簡素だが実に合理的に出来ていた。ほとんどメンテナンス・フリーの建築だった。これらすべて、スティーヴの采配で建設されたそうだ。
巨大なパラボラアンテナがあり、衛星を使ったインターネット接続がここでは可能である。

リサーチ・センター

私たちはここで、研究所周囲に広がる熱帯雨林を案内してもらった。
フレンド・オブ・オサで働くニカラグア人、コンセプシオン氏が先頭を歩き、中米特有の巨大なマチェテと呼ばれる鉈で藪を切り開きながら進む。後にスティーヴ、ジム、二宮知子そして私と続いた。

リサーチ・センター周囲の熱帯雨林

2時間ほどのトレッキングだったが、私たちは動植物の織り成す巧妙な共生関係を見ることができた。
まだ新しいジャガーの足跡や糞を見つけた。葉切り蟻はいたるところで帝国を築いている。ホエザル、クモザル、そして

彼らを養うさまざまな椰子。板根（バットレス）で自立する巨木、そしてそれに寄生する蔓性植物。樹冠を絡み合わせて互いに支えあう木々たち。
熱帯雨林は、いかに精妙なバランスで維持されているかを目の当たりにする。
私たちはこの森林から無限の情報を引き出すことができるだろう。
まさに天然の図書館である。
フレンド・オブ・オサの研究所はまったく絶好の場所に築かれたものだと感心する。

葉切り蟻の幹線道路

私たちの滞在と入れ替わりに、アメリカのインディアナ大学所属のインド人生物学者ムクタさん（Ph.D）がリサーチ・センターでの研究を終えて帰国するところだった。
彼女はオサ半島に広く生息するカエルの声によるコミュニケーションを 3 ヶ月にわたって研究したそうだ。研究成果は実り多かったそうである。
現地の人々との心あたたまる交流もあったらしい。馬に乗ったり、サルサを教わったり、チーズを作ったりした写真を見せていただいた。
彼女は自分の体の2倍ほどある荷物をかかえ、これから帰国するのだという。荷物の中には膨大な音響実験装置、生きたカエルの標本が入っているそうである。
数時間という短い時間であったが、彼女とは分野を超えて科学的な論議を深めることができた。才能ある科学者と話すのは本当に楽しい。
別れ際、彼女いわく、毒蛇とサソリが出るので十分注意するとの事。

●有機農法

フレンド・オブ・オサは、研究所周辺で徹底した有機農法をサポートしてもいる。そこで生産される有機肥料や農産物の余剰はオサ半島全域に点在するエコロッジにも卸し、NPO活動の貴重な資金源になっているそうだ。

山羊小屋

農場を案内してもらったが、野菜や果物だけでなく、あらゆる種類の薬草が研究目的で栽培され、一帯に独特な芳香を漂わせていた。この場所も以前は牛の牧場だったそうだ。
作業に携わる人々の住居や学校も敷地内に置かれ、仕事の合間に海釣りに出かける人も見かけた。
地上の楽園とはまさにこういう所であろう。
近年、ここでの品種改良の結果、植えてから2年未満で実をつけるアブラヤシの開発に成功し、現在オサ半島全域で栽培がはじめられているという。

有機農場付属の学校

コスタリカの法律では、海岸から内陸側に 150m のエリアはたとえ私有地であっても手を加えてはならない。
スティーヴたちは、さらに進んで、あらゆる河川の両岸から 150m のエリアを森林に回復させるべく、オサ半島全域の牧場主を説得する活動を続けている。
フレンド・オブ・オサの骨太の活動には頭がさがる思いだった。
[8 月 20 日]

●プエルト・ヒメネス

私たちは、その後、フレンド･オブ･オサのオフィスがあるプエルト･ヒメネス市街、鏡面のように穏やかなドゥルセ湾、かつてバナナの輸出港として栄えた対岸のゴルフィートを視察した。
フレンド･オブ･オサのオフィスは市街の真ん中にあり、所長としてデニス氏が常駐している。図書室、会議室、通信室のほかにヴォランティアの人のための宿泊施設も備えている。ここも私たちの活動の拠点として、候補地のひとつであった。

フレンド・オブ・オサのオフィス

ドゥルセ湾は穏やかな海で、荒れることはないという。
湾の海上ど真ん中で優雅に横断している一匹の蝶を見かけた。

ドゥルセ湾のイルカの群れ

イルカの群れは日常的に見られる。

ドゥルセ湾岸に孤立した建築

海岸沿いには断崖を背にし、海からのアクセスしかできない、孤立した建築物が点々と見られた。
いったいどんな人が住んでいるのだろうと思う。
ドゥルセ湾を挟んで、プエルト･ヒメネスの対岸はゴルフィートという比較的大きな街があり、フェリーが通っている。かつてここには米国の大きな会社があり、バナナ輸出で栄えた町で、古いスタイルの木造家屋がひしめいていた。
ここには裁判所や高度医療の病院もある。

ゴルフィートの免税市場

この街を一回りしたところ、中心にはまるで拘置所のような物々しい壁に囲まれた広大な区画があった。壁にはいろいろな海外企業の広告が描かれている。
聞くと、米国の巨大企業が撤退した後、雇用の喪失と過疎化を避けるための苦肉の策として、コスタリカ政府はここに隔離された免税市場を建設したのだという。
コスタリカでは生活必需品には税金はかからないが、輸入電化製品などの贅沢品には非常に高い消費税がかけられている。そのような背景から、ゴルフィートに来れば外国に行かなくても無税の製品が手に入るということで、この街は依然衰退することなく、活気を保ち続けているとのことだ。
コスタリカのすぐれた行政手腕の一端である。

[8 月 22 日—9 月 11 日]

●ラパルマ

オサ半島視察の充実した一週間の後、私たちは最終的なワークショップ実施の選出をした
どこも捨てがたかったが、悩んだ末、プエルト･ヒメネスから北へ車で 40 分ほどのところにあるラ･パルマという農村で実施することにした。

関係者との打ち合わせ

この地域はマタパロ側と好対照で、ニカラグアやパナマから移住した難民が多く居住している。
産業としては牛や馬の牧畜、アブラヤシや米などの農業、メリーナ材の林業などが中心である。
カリブ海側とはちがって、太平洋側のこの地域は最近ようやく竹を栽培する人が増えてきた段階である。
この地に「セントロ･バンブ」というフレンド･オブ･ザ･オサの外部機関があり、竹の建築や工芸品を地場産業として根付かせる取り組みが始まっていた。竹の有効利用は森林保護

につながり、しかも貧困を改善する有効な方法でもあるからである。
この施設を建てたのは、この周辺に広大な有機農場を持ち、数年前から竹林の育成も始めたアルフレッド氏であり、フレンド・オブ・ザ・オサの中心人物でもある。
私たちは家族ぐるみでアルフレッドのお世話になり、ここに数週間腰を据えて、建築や音楽のワークショップを行うこととなった。

アルフレッドは若いころ東ドイツの大学に 6 年間留学し農業工学を修め、さらに長期のアメリカ滞在を経験したことのある人で、英語とドイツ語を話す。
彼は 10 人兄弟の 6 番目の子供だが、15 年ほど前に帰国してからは農家を引き継ぎ、結婚して 2 人の男の子をもうけ、事実上一族の家長としてきりもりしている。
ほとんど英語の通じないこの地で、英語を話す稀有なコスタリカ人であるアルフレッドから国内事情を詳しく教えてもらうことができた。
以前から私は、奇跡と言われるコスタリカの政治情勢に非常な関心を持っていたので、これは願ってもないことであった。
コスタリカの内部事情についての報告は末尾に譲るとして、ここで私たちがどのような活動を行ったかを記そう。

●事業開始

セントロ・バンブに滞在中、私たちは大きく 4 本柱の活動をした。

(1)週末特別講義

週末（8 月 26 日と 9 月 1 日）には大勢の参加者を集め、特別レクチャーと星籠ワークショップ、音楽ワークショップをした。

(2)建築ワークショップ

8 月 27 日から 9 月 11 日まで「ヒラソル・トレ（ひまわりの塔）」を建てる長期建築ワークショップを行った。

(3)定例音楽ワークショップ

前記建築ワークショップの期間、毎日夕刻に、地元の人と竹の音具を使った打楽器演奏ワークショップを行った。

(4)定例星籠ワークショップ

同様に、前記建築ワークショップの期間、竹の星を組み立てる星籠ワークショップを毎日行った。

大きく分けたのはあくまでも便宜上のことで、4 本柱はそれぞれ「竹と黄金比」という同一主題の変奏曲である。私はそれぞれの活動の柱を臨機応変に有機的に織り込んだので、全体はひとつの経験として現地の人々に受け入れてもらえたはずである。
だがこの報告書では、簡便のために順を追ってそれぞれの詳細を記すことにしよう。

****

●準備（8 月 22 日〜8 月 25 日）

まず私たちはセントロ・バンブでのはじめの 1 週間を使って、竹の幾何学的オブジェ「星籠」や竹の音具による演奏のワークショップに使う材料を制作した。

星籠ワークショップで使う長さ 2m の細竹は、スティーヴが大量に用意してくれた。
コンセプシオンが節を取り、私は長さを切りそろえる。

音具用の竹はアルフレッド提供の地元の竹（グアディア）である。
できるだけ多くの人が参加できるように、すべての節間にH字型のスリットを切り、竹のスリットドラムを作成した。
道具は日本から持ってきたドリルと鋸と鉈のみである。
一そろいの大工道具ぐらいはあるだろうと思ってはいたのだが、ここでは予想以上にその調達が困難であることがだんだんと明らかになる。
では地元の人はどうしているのか？
鋸はもちろん皆携帯しているが、その他の道具としては大鉈と丸鋸、チェンソーがあるだけで、それで大抵のことはやってのける。
もちろん特殊な道具を使えばもっと精度の高い仕事はできるのだろうが、そうした追求にはきりがないことを本能的に警戒しているのかもしれない。
不要な「洗練」はある意味「悪」なのであろう。

だから私から見れば使い物にならないような壊れかけの電動ドリルやジグソーを彼らは荒馬を手なずけるように使い続け、実際仕事を立派にこなしている。
郷に入れば郷に従えである。
私は機材を要求することをあきらめ、時間はかかるが持ち合わせの道具だけで出来るところまでやろうと覚悟を決めた。

竹割り

コスタリカでは竹ひごが手に入らない。
日本ではどの文房具屋にも置いてあるものだが。
こんなこともあろうかと、私は念のため日本から竹ひご製造器を持って来てあった。
余った竹を使って竹ひごを作ってみる。

竹ひご作り

実をいうと私はこれを使うのははじめてであった。なぜなら日本の竹ひごは安いので、これを使う必要はまったくないからである。こんなところにも竹文化における日本の恵まれた環境を痛感する。世界中から羨望の的になっていることを殆どの日本人は知らない。
予想以上に大変で、1 本仕上げるのにも時間がかかる。
これが日本では1本1円もしないということは実は驚くべきことである。大量生産の技術もさることながら、日本ではいまだ相当の需要があるということである。

アルトゥーロとジェイソン

アルフレッドの次男アルトゥーロが学校から帰ると積極的に手伝ってくれた。
毎日父親の仕事を手伝っているからだろう、彼はまだ小学生だが、私が何をしようとしているかすぐに察し、的確な手助けをしてくれた。
彼は既に手仕事のスキルを相当会得しているようだ。
ときどき見せるロープ縛りのテクニックは実に大人びた手さばきで、基本技術はとっくに習得し、自在な応用の境地にまで達している。
驚くべき子供である。
今の日本にこんな子供はまずいないだろう。一昔前の日本にはごろごろしていたのだろうが。

写真はこうして完成した材料一式である。
****

(1)週末集中講義

●第一回目週末集中講義（8 月 26 日　日曜日）

セントロ・バンブ

午前中から午後にかけて 4 時間ほどの集中講義とワークショップを行った。オサ半島全域から 40 人以上の参加者が集まった。冒頭に1時間半ほど、スライドショーで過去の作品の写真を見せ、音楽や演奏の録音などを聞いてもらった。
理論的背景も片言のスペイン語を交え、簡単に説明した。

講義の準備

スライドショーの冒頭

作品展示

会場の傍らには日本から持ってきた代表作を展示する。
かさばる作品ばかりなので、部品だけを持ってきてこちらで組み立てたものが殆どである。

六勾納豆で遊ぶ参加者

特に写真の六勾納豆や十勾納豆は大人から子供まで人気だ。この大きいものを作ると言うと、皆眼を輝かせた。

熱心に見入る参加者たち

星籠デモンストレーション
スライドショーの後に、オリジナル音楽「フィボナッチ・ケチャック」を BGM にして、直径 2mの巨大星籠をその場で組み立てた。
組み立てにかかった時間は 4 分ほどである。

完成後、引き続きワークショップで竹を再利用するため、惜しげもなく分解する。
数人の力を借り、一瞬にして解体して見せた。実はこれがひとつの見せ場だったのである。

星籠ワークショップ
解体してばらばらになった竹を、ふたたび段階を追って説明しながら組み立てる。
参加者は見様見真似で星籠を実際に組み立てる経験をする。

組み立ての第一段階である。
言葉はいらない。
アキ（ここだ）と言えば十分スキルは伝わる。

みな積極的に参加してくれる。

フィボナッチ・ケチャック　ワークショップ

星籠のワークショップが終わり、次は竹の音具を使った打楽器演奏「フィボナッチ・ケチャック」のワークショップを行った。二宮と私で、まず簡単な模範演奏を聞かせた。

その後参加者に演奏を体験してもらった。
なかなかまとまった演奏にならない。
この音楽にはどうしても集中力と落ち着いた雰囲気での練習が不可欠である。
このワークショップはあくまでも導入にすぎず、興味を持った人には、その次の日から始まるヒラソル・トレ（ひまわりの塔）の建設中、毎日夕刻にフィボナッチ・ケチャックの演奏練習をする旨を知らせ、参加を呼びかけた次第である。

こうしてこの日のレクチャーおよびワークショップは終わった。
スティーヴからは「Great Workshop!」と評価してもらった。
地元の人にも、十分な共感と理解が得られたと思う。

●第二回目週末集中講義（9 月 1 日　土曜日）

9 月 1 日、私は第二回目の集中講義とワークショップを行った。

今回は人数こそ少なかったが、ツワモノの参加者が揃った。そのひとり、コスタリカ人の奥さんとともに訪れたマルクス氏（写真一番手前）はドイツからの移住者であり、この地で建築家として活躍されている。彼は幾何学的知識も豊富で、音楽に関する造詣も深い。まさに私にとって電撃的な出会いであった。
彼は急遽私の英語による説明をスペイン語に通訳する役を買ってくれた。マルクスは 1 を聞いて 10 を知る人だから、彼自身の補足も加わり、この日の参加者にとってはさぞかし内容の濃いレクチャーとなったはずである。
さらにもう一組、はるばるロンドンから来たご夫婦が参加されていて、コスタリカ視察旅行中にたまたまこのイベントのチラシを見て参加することにしたのだという。このジョンとリアンダのお二人はともにネパールで貧困撲滅のための社会運動をされている活動家であった。願ってもない出会いである。

説明に聞き入る参加者たち。

ラップ・トップ・パソコンを使い、親密な雰囲気の講義が続く。

講義の後、例によってフィボナッチ・ケチャックをお聞かせしながら、巨大星籠を4分で組み立てるデモンストレーションをする。
そしてフィボナッチ・ケチャックの演奏の仕方を段階ごとに説明する。

ジョンはジャズ・ミュージシャンでもあるという。
マルクスも一瞬にしてフィボナッチ・ケチャックの自己相似原理を理解し、体得した。
練習開始からわずか 30 分もしないうちに、いつのまにか私たち 3 人はグルーブ感あふれる演奏に没頭していた。
早くもジョンは即興をがんがん入れて遊び始めた。
私もそのジョンの軽やかな戯れを受け、こちらからはアクセントをつけたリズムで応答し、彼の即興を支えた。
この 3 人で打楽器アンサンブルを結成したくなったほどだ。
****

(2)建築ワークショップ（8 月 27～9 月 11 日）

●ヒラソル・トレ（ひまわりの塔）建築ワークショップ開始

話は前後するが、8 月 27 日から、今回のメインである長期建築ワークショップを開始した。

日本の孟宗竹に勝るとも劣らない太さと強度の青竹を 30 本ほど用意していただいた。長さは 7 メートルである。
はじめに竹を太さ順に並べ選別する。

そしてすべて寸法の異なる 70 本の部材を正確に切り出し、墨付けのあと穴あけをする。
前述のとおり、テーブル・ソーなどあるわけもないので、結局日本から持参した手鋸一本ですべての作業をした。
こんなに設備の限られた環境で制作するのは初めてである。
テーブル・ソーがあれば数時間で済む作業だが、ここでは数日を要した。
加えて、太陽は真上から照りつけ、あまりの暑さに仕事がなかなかはかどらない。

竹を切っていたら気づいたのだが、切ったばかりの断面にミツバチや蝿がたくさん集まってくる。ためしに舐めてみるととても甘い。
おそらくこの竹を圧搾すれば砂糖が抽出できるにちがいない。さすがに熱帯の竹は一味違う。

これはまるで竹製のマリンバのようだが、ひまわりの塔のパーツを並べたものである。

フレンド･オブ･オサのスタッフ、コンセプシオン氏が毎日手伝ってくれた。彼は子供のころ、内戦の激しいニカラグアから、この平和国家へ家族ぐるみで移住したのだそうである。とても親切で、言葉が通じなくても意思は伝わる。
刃物をとても器用に操る。

今回のひまわりの塔は協議の末、コスタリカ仕様ということで、いつもの合板による壁柱を作らず、5 本の柱だけで立つオープンな東屋とすることになった。
合板はすぐに傷むし、風通しがわるいのでどうしても使いたくないと言うのである。
「ひまわりの塔」特有の耐震性は失われるがやむをえない。
こうした突然の方針変更にも柔軟に対応できるのは、私の作っているものが幾何学や数学にもとづいているからこそである。
もしもこれが数学と無縁であったなら、材料や道具の制約だけで製作はただちに不可能となるだろう。
そして人々からの共感も得られなかっただろう。
数学に根ざしているからこそ機転や融通が利くということはおおいにあり、異文化の地で作れば作るほどその醍醐味を感じる。
既成概念がまったくないゼロの状態から考える自由さは、私にとってかけがえのない芸術行為そのものと言っていい。
またそうした自由さの継承が、その国の伝統を進展させる原動力になるのだろうと思う。
だから「伝統」と「前衛芸術」は私の中ではまったく矛盾しないのである。

コンセプシオンが掘っている穴はメリーナと呼ばれる木の丸太を差し込むためのものである。
深さは 1m。柱は 5 本なのでこの穴を 5 箇所掘らなければならない。
地盤は赤みがかった粘土質で柔らかく、石はほとんど出ないので、そう困難ではない。
しかし 1 メートルも掘らないうちに穴には大量の水がたまってしまうので、それを掻い出すのが大変であった。

アルフレッド、ビエンベニード、コンセプシオン、ヨニが協働で最初の柱を設置する。
縄文時代を髣髴とさせるプリミティブな工法である。

メリーナ材を運ぶトレーラー

メリーナは地元のプランテーションで栽培されている典型的な木材で、わずか 15 年で成木となり使用される。
毎日、夕刻になると大量のメリーナ材を運ぶトレーラーがサンホセ

方面に向かうのを見た。
木質はやわらかく、おそらくこうした工法では地中部分は永く持たないかもしれない。
まあ今回はデモンストレーションということで、これもまたやむをえない。

5 本の柱が立った。
これらは正五角形を形成しているわけではない。
フィボナッチ葉序に基づいた上部の小屋組み構造と同様の原理で決められている。

5 本の柱の頂を厳密な高さで切らなければならない。
私はいつものように水糸と水準器を使って水平をとろうとした。

それを見たアルフレッドが透明なホースと水だけでレベルをとるいい方法があるという。
恥ずかしながら私はこの歳までこれを知らなかった。
なるほどうまい方法である。
後で調べると、日本ではこれを「水盛」というそうである。

みな顔を合わせれば「ムーチョ　ソル」を連呼する。直訳すれば「太陽がいっぱい」。つまり暑くてたまらない。
ビエンベニードがときどき敷地内にたわわに実った椰子の木からいくつか切ってくれ、私たちは暫し喉を潤した。

椰子の実で喉を潤す

●竹の小屋組み（9 月 6 日〜7 日）
柱が立ち、すべての部材が揃った段階で、いよいよ竹の骨組みの建設を始める。

竹材の加工を、二宮知子とコンセプシオンが手伝ってくれたおかげで、非常に精度の高い部材に仕上がった。
小屋組みは気持ちがいいほどぴったりと組みあがっていく。

小屋組完成!

トロピカルなフィボナッチ・タワーになったものである。

下からの見上げ。木漏れ日も一味違う。

●椰子の葉による屋根葺き（9 月 8 日〜9 日）

コスタリカでの建築ワークショップでは、ひまわりの塔を恒久的な建築として残すべく、屋根を葺くことがひとつの挑戦であった。
雨にさえあたらなければ竹という素材は何十年、何百年の耐久性がある。
屋根を葺く素材としては、コスタリカに腐るほどある椰子の葉を使わない手はない。

5mの竹ひごを作る

ビエンベニードが 5m の竹ひごを作ってくれた。なんとも豪快な方法である。

その竹ひごを、フィボナッチ数「8」を法として合同な螺旋に沿って巻きつけた。これは後で椰子の葉で屋根を葺くときの支持体になる。

8 本の螺旋が際立って見える。
子供が面白がって登りはじめた。
私は振り子となり、頂点からつるされたロープにぶら下がった。
中央にこうした振り子を吊るすことで、この小屋組みは大変安定するのである。
この力学は日本のお寺に残る五重塔と同じである。

いよいよ屋根葺き開始である。
これは正真正銘、はじめての試み。
おそらく椰子の葉をこんな風に螺旋状に撓めて屋根を葺いた例はいまだかつてないであろう。

最初の螺旋

残すところあと 2 本の螺旋。
まるで螺旋階段のよう。

9 月 9 日完成!
周囲の風景に馴染み、まるでずっと前からここに建っていたかのようである。
小屋の下はさすがに涼しい。新しい畳のような椰子の葉のいい匂いがする。さっそくハンモックを吊るして涼むことにした。
この建築には金属は一切使われていない。
最近炭素を固定した植物だけで作られ、やがては完全に土に帰る。自然に負荷を与えない、正真正銘いわゆる「持続可能な建築」である。

下からの眺めである。すこし隙間は見えるが、豪雨のときも別段問題は無かった。

伝統の仕掛け罠

ヒラソル・トレに触発され、ビエンベニードが上のような構造物を作ってくれた。短冊状に割いた竹で櫓を組み、稜線に沿って紐で固定するとこのような形に収まるらしい。真横から見るとこれは懸垂線に思えるのだが、解析が必要である。
持ち上げるとかなりの重量で、非常にしっかりしている。これは鳥を生け捕るときの罠として、コスタリカでは良く作られていたそうだ。
私も息抜きを兼ねて、日本で定番のロープワークである「男結び」や「南京結び」を伝えた。皆その威力にとても感心していた。彼らは今後活用してくれるだろう。
****

(3)音楽ワークショップ (8 月 22〜9 月 11 日)

毎日のヒラソル・トレ (ひまわりの塔) 建設作業の後に、星籠ワークショップと、フィボナッチ・ケチャック・ワークショップをほぼ毎日行った。

フィボナッチ・ケチャックは日本語では通称「たたけたけ」、ローマ字表記は「TTKTK」と呼んでワークショップを続けてきた。ここコスタリカでは「TTKTK」を「ててかてか」と発音する。

オマル氏と「ててかてか」を試みる

最初の「ててかてか」に参加したのは、音具製作中にたまたま通りかかったオマル氏である。
しかし、なかなかリズムを飲み込んでもらえないで苦労する。

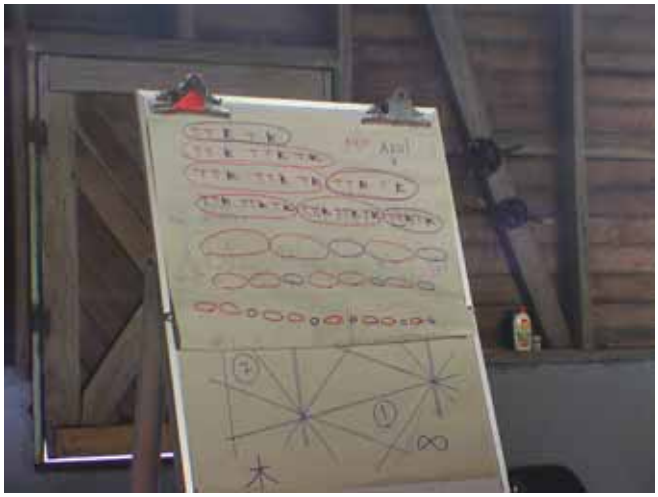
参加者は地元の子供が多く、さながら放課後学校のような風情だった。
子供ならリズムの習得が早いかと思いきや、意外にも大人同様、非常な困難にぶつかった。
これは一筋縄ではいかないと悟る。

8 月 29 日。

9 月 2 日。
戸惑いながらも、みな面白がって毎日参加してくれた。

ステファニーという11歳の子がついに原理を会得し、安定した演奏ができるようになった。
教育は粘りと忍耐である。

9 月 5 日。「ててかてか」の五拍だけは打てるようになったジェイソンが友達のホセルイスを連れてくる。
ホセルイスはあっという間にかなり複雑なリズムまで流暢に叩けるようになった。



次の日、図を駆使して、フィボナッチ・ケチャックの自己相似構造をホセルイスに理解させる。
彼は僕がいなくなっても、この村で「ててかてか」の先生になってくれるにちがいない。

3 人での安定した演奏。しかしまだ即興をするほどの余裕はない。

9 月 9 日。
建築ワークショップが終わった後、激しい雷雨が始まった。
当分上がりそうもない。
めずらしく大人ばかりが集まり、「ててかてか」になだれ込む。
やはりどうしてもリズムが打てない人が続出。
その人には 2 拍を打ってもらい、ペースを支配してもらうことにした。
これが功を奏し、すべての参加者で演奏を楽しむことが出来た。
即興演奏する余裕が生まれたほどである。
みなでビールを飲みつつ盛り上がり、夜まで演奏を楽しんだ一日だった。
写真は左からホセマニュエル、ヨニ、ヒセラ、アキオ、ビエンベニードである。

9 月 11 日。
この村での滞在も終りに近づいたある日、ローカルテレビ局が取材に訪れた。
いままで全然演奏が安定しなかった子が、いざカメラで撮影されていると知ると、突然うまく演奏できることが判明する。現金なものである。
教育の常套手段として、それが見せかけであろうと、何らかの権威による緊張感を演出してやることも時には必要だと痛感した。

左からアキオ、ホセマリオ、ジェイソン、アルトゥーロ、ホセルイス、トモコ、ロメル。

以下 9 月 11 日の日記より

最初のうちは、大人も子供も区別なく、まったくリズムが身体に入らないので途方にくれた。
日本ならば、30 分もあれば基本的リズムは大抵の人がマスターしてしまうものだが、ここではもっとも単純な「たたけたけ」の 5 拍のリズムでさえ教えることが困難である。
これは単に教え方だけの問題ではないだろう。
この目に見えない障壁はなんだろうと私はずっと考えながらワークショップを続けた。

コスタリカの人はみんな音楽が好きだし、サルサを踊り、地元のお祭りのお囃子だと、みな太鼓を機関銃のように

正確に叩く。リズム感はとてもいいはずである。
おそらく、音楽はすべて口伝で、楽譜を見る習慣というものがないのではないだろうか。
おしなべて「読み」と「打ち」がなかなか一致しないのである。

いっぽう日本人だって楽譜を読む習慣が決してあるとはいえない。
日本の場合、やはり短歌や俳句に親しむ文化的背景は大きいと思う。
日本語を読むときに、私たちは無意識に打楽器奏者が楽譜を読む時と同じ脳内変換をしているに違いない。
いわば日本語は「打楽器的な言語」といえるのではないだろうか。
それに対して、他の多くの言語は笛やバイオリンなどの「旋律的な言語」だと言える。

そういえば以前、ある日本人がフィボナッチ・ケチャックのワークショップのあと、次のような感想を言ったことを思い出した。
基本的リズム「ててかてか」は 5 拍で循環するが、厳密には 2.5 拍子と定義される。
ジャズの名曲「テイク・ファイブ」はまさしくこのリズムで書かれている。
その人は、キーボードでテイク・ファイブを流暢に弾けるそうだが、フィボナッチ・ケチャックの「たたけたけ」がなかなかうまく叩けなかったと告白した。
ちなみにその人はドイツで生まれたそうである。

さて、コスタリカでのフィボナッチ・ケチャックのその後の経過であるが、地元の人は戸惑いながらも皆おもしろがって、結構ついてきてくれた。
さながら放課後学校のような様相を呈した。
今やこの村では「ててかてか」が小さなブームである。
あきらめず、たっぷりと時間をかけただけあって、最近ようやく演奏らしい演奏ができるようになってきた。
中でも特に安定した演奏ができ、自己相似原理の完全な理解にまで至ったのは 11 歳の女の子と男の子、15 歳の男子、大人はわずか一人である。
人数は少ないが確実にフィボナッチ・ケチャックの種子をコスタリカに植えられたと思う。
彼らは僕がここを去っても、この音楽を広げていってくれるだろう。
昨日はテレビ局の取材もあった。
数十年後の展開が楽しみである。

****

(4)星籠ワークショップ(8 月 22〜9 月 11 日)

8 月 22 日、毎日手伝ってくれているコンセプシオンを相手に、星籠ワークショップを始める。このワークショップはフィボナッチ・ケチャックと同様、ほぼ毎日ヒラソル・トレの建設作業の前後に決行した。

8 月 23 日。

8 月 24 日、ローカルテレビ局の取材前インタビューを受ける。
テーマはバンブー・マテマテカ。

8 月 31 日

9 月 5 日。
この日は近所の子供たちも参加してくれた。
1 回経験しただけでは憶えられるものではないのだから、毎日来れば良かったのに。

9 月 10 日。
前述のローカルテレビがビデオカメラを持って公式取材に訪れた。
アルフレッドがスペイン語に通訳してくださった。
記者兼カメラマンの Alexi はかなり興味を持ってくれて、取材は長時間にわたった。

****

お別れパーティー (9 月 12 日)

この村を発つ前の日、地元の人がお別れパーティーを開いてくれた。
以前から、ひまわりの塔の内部でぜひ火を焚き、料理をすることを強く勧めていたのだが、アルフレッドが本当にそれを実現してくれた。
使われなくなったトレーラーのホイールを転用して囲炉裏に見立て、バーベキュー用の焼き網はどこかの金網フェンスの切れ端である。
こういう機転は大好きである。
大量の牛肉やバナナ、トルティーヤを焼いて食べた。
ユッカというイモも塩茹でして大勢で食べた。

竹が余っていたので「火吹き竹」を作ってさっそく活用した。
コスタリカの人は知らなかったらしく、その火炎放射器のような威力にとても驚いていた。
残念ながら自在鉤までは作る余裕はなかった。

日が暮れて、セントロ・バンブの特設会場では、先日取材に訪れたローカルテレビ局の Alexi が、編集したばかりの番組を特別上映した。
かなり長時間の番組で、なかなか良い出来栄えだったと思う。

その後、アルフレッドが観衆の前にわれわれを呼び出し、ありがたいスピーチをしてくださった。

そしてまずこの遠征の同行者であるトモコへ、皆からソンブレロがプレゼントされた。
今回出会い、友達になった人々の名前が書き込まれていた。

私には中米特有の大鉈「Machete（マチェテ）」を記念にいただいた。
牛皮製の装飾的な鞘にもやはり、今回お世話になった方々の名前がびっしり書き込まれてあった。
とても嬉しかった。コスタリカの男として認められた気分である。
コスタリカの男衆はみなこれを腰に下げて仕事に出かけ、日常の作業はほとんどこれ1本で済ませている。ジャングルの藪を切り開いたり、木を切り倒したり、ココナッツを割ったり、蛇から身を守ったり、いわゆる万能ナイフである。返礼として、今回ここで大活躍してくれた、日本から持参の竹引き鋸と竹割り鉈を置いていくことにした。

****

[9 月 12—14 日]

●マタパロでの番外ワークショップ

9 月 12 日、ラ・パルマでの3週間におよぶ活動を終え、私たちは一旦プエルト・ヒメネスのフレンド・オブ・オサのオフィスに戻った。
そのころスティーヴはアメリカに戻っていたが、彼からオフィスに国際電話があり、新たにワークショップの提案があった。
次の現場はそのスティーヴの家から徒歩 20 分ほどの所にある Tierra de Milagros というヨガ道場であった。

私たちはそれを引き受け、次の日、さっそくコレクティーボに乗ってマタパロへ赴き、留守中のスティーヴの家に寄宿することにした。
そこには星籠ワークショップ用の竹材がストックされてあった。

14 日朝、コンセプシオンと私は、朝一番でまず竹の切りそろえと節を払う作業に取り掛かった。

材料が揃うと 2 束に分けて束ね、コンセプシオンと共に肩に担ぎ、徒歩でヨガ道場に向かった。
およそ 30 分間、熱帯雨林の中を歩き、クモザル一族などを眺めつつ歩いた。

Tierra de Milagros にようやく到着。
太平洋に面したすばらしいロケーションである。
そのヨガ道場は、カナダ人男性のブラッドとアメリカ人女性ニキによって運営されている。
彼らはマタパロに最も早く移住してきた人たちで、かれこれもう 20 年になるという。
ここの土地の大部分も以前は木のない牧場だったそうだ。
しかし今ではすっかり熱帯雨林が回復している。
その鬱蒼とした森林の中、自然に負荷を与えない程度にコテージを建て、地元の人々や滞在者にヨガを教えながら森林保護と育成に当たっている。現在は気心知れた多くのスタッフにも恵まれ、ひとつのコミュニティを形成している。
英語の家庭教師も数名いて、ここは学校としての機能もあるのだろう。
ブラッドは裸足に短パンのみの出立ちで、筋骨たくましく、まさに開拓者の風格である。彼はちょうどコテージの修復に励んでいるところだった。椰子の葉で葺かれた高床式の家をいくつか建てている。竹はあまり使っていないが、立派な建築である。

この広々としたレストランでワークショップをすることにした。

なかなか凝った屋根の構造である。フラッド自らの設計である。

敷地にはさまざまな種類の竹が植えられていた。

ワークショップの前にオーナーのブラッドとニキに自己紹介がてら過去の作品をお見せした。

いよいよワークショップ開始。

星籠はヨガ･スタジオの天井から吊るされることになった。
ヨガ行者は星籠の幾何学を曼荼羅として使い、瞑想に耽るであろう。

仕上げに綿ロープで端部をしっかり結わえる。この縛り方は日本の伝統的な縛りを応用し、星籠用に工夫したものである。まず緩むことはない。

ロフトからの眺め。

あっというまに完成。

振り返ると太平洋が見渡せる。
最高の立地である。

[9 月 15—16 日]

●カラテのマルクス

ほぼすべての任務を終え、帰国の航空券の手配も済み、出発までスティーヴの家で数日静かに過ごそうときめこんでいたところ、我々がスティーヴの家にいることを聞きつけ、カラテのマルクス氏が突然来訪した。彼は第二回週末ワークショップの参加者で、即興で通訳もしてくださったドイツからの移住者である。

彼はカラテの家に泊まらないかと誘ってくれた。

我々はそのまま彼のトヨタに乗ってカラテへ向かった。

例によって悪路に激しく揺られながら、およそ 40 分かかってようやく彼の家に着いた。

彼も広大な熱帯雨林の土地を所有している。

彼はミュンヘンやベルリンで建築や音楽の仕事を経験した後、あの 9.11 同時多発テロから米国のアフガニスタン爆撃を機に、軍隊のないコスタリカに移住することを決意したのだという。

カラテは公道の終着点であり、その先はコルコバード国立公園である。

マルクスはこの土地の高台に海の望める瀟洒な家を建て、コスタリカ人の奥さんガブリエラと住んでいる。

彼の家もあらゆる意味で独創的だった。

土地の高低差を利用して湧き水を巧みに活用していた。

植物を熟知するマルクスは敷地内にさまざまな植物を植え、薬草や果樹の楽園になっていた。もちろん竹も豊富である。

人を警戒しないハチドリやオオハシが住み着いているのにはおどろいた。

クモザルの家族も間近に見えた。

みな快適そうに生活している。

その日彼はちょうどサンホセ出張から戻ったばかりであり、サンホセの植物園で購入したドリアンを皆で食したあと、「20 年後にはおいしい実をつけるだろう」と言いながらその種を庭に植えていた。もちろん真面目に言っているのである。

今でこそ彼らは優雅に過ごしているが、ゼロからここまでのインフラまで整えるのには想像を絶する苦労があっただろう

マルクスは将来ここに世界中からアーティストや学者を招いて、竹を使って自由に制作したり、ワークショップやレクチャーを開いたり、一種のオープン・カレッジを創るのが夢だという。その壮大な青写真も見せてくれ、コスタリカ政府もそれを許可したのだという。いずれにしても長期計画である。

彼はまだ若い。

私は彼の選んだ道こそ王道だと思った。

いつかまた彼と仕事をすることがきっとあるだろう。

マルクスはベルリン時代に囲碁を覚えたらしく、部屋に碁盤が置いてあったのでさっそく一局打つことにした。まさかこんなところで碁が打てるとは思ってもみなかった。

結果は私の大勝だったから、彼はまだ初心者である。

ドイツと日本という、地理的にもまったく異なる文化圏で生まれ育った私たちが、コスタリカはオサ半島の辺境で出会い、共通の本を読み、共通の興味を持ち、稀なる共感を得られたことはまったく奇遇としか言いようがない。

私たちはマルクスの家で、この上ない精神的な刺激を受け、今回の遠征のしめくくりとしてふさわしい数日間を送ることができた。

****

活動を終えて

私はさまざまな国でこの種の活動をしてきたが、いままでで一番充実した事業になったと思う。

建築、音楽、幾何学という一見異なる分野を自由に横断し、時間をたっぷり使って、納得のいくまで地元の人と一対一で向き合うことができた。
数式や専門用語を一切使わずに、プリミティヴな方法と材料で幾何学を人々に理解してもらえたと思う。
また彼らの目の前で、意表をつく形で竹を活用したことによって、こんなに面白い素材はないということに皆気づいてくれたと思う。
竹の建築や工芸など、伝統的な技術を参照することももちろん大切だが、それ以上に、竹にはまだまだ途方もない試行錯誤の余地が残されていること、それが何よりの魅力であり、私が一番伝えたかったことのひとつである。
だれでも竹を使って発明家になれる。
自分の家さえ作って住むことができる。
そうした自由な発想の道具として、竹は今後ますます注目されていくであろう。
だから私は、地元のリーダーに、もし竹の地場産業を本気で興そうとするならば、安易に異文化をそのまま導入するのではなく、自分たちでゼロから考え、オリジナルを生むことに賭けるべきだと強く勧めた。竹にはそれだけの潜在力があるのだからと。

とりわけ今回は音楽においても貴重な成果を残せたと思う。
私は新しい音楽の種をこの地に撒いたのである。
多くの子供たちの身体にフィボナッチ・ケチャックの非周期的リズムを確実に刻印できたと思う。
このリズムを一旦身体に受け入れた人は、もう既存の音楽では飽き足らなくなってしまうだろう。
あの子供たちは、日々のワークショップで獲得したリズムを、成長とともに彼らなりに発酵させ、さらに多くの人々に伝え、発展させていくだろう。
誇張ではなく、オサ半島起源の新しい音楽が、数十年後には生まれるかもしれないのである。
ちょうどリオ・デ・ジャネイロでボサノバが、ニューオーリンズでジャズが発祥したように。

私はよく自分のことを「石器時代の幾何学者である」と、半分冗談、半分本気で言っている。
閉塞した文化的局面のいたるところで、もう一度石器時代の心意気に立ち返るべきだと思うからである。
既成概念にとらわれず、プリミティヴな方法で自由に発想することが、現代ほど求められている時はないと思う。

ハイテク機器を使わなければできないことなど高が知れている。

そしてとりわけコスタリカの風土は、そのような自由な立場に立ち戻れるフットワークの軽さを多くの人が有しているように感じた。

今回の私たちの活動は、あくまでも導入部、原初的な種まきであったが、これは一回限りに終わらず、継続的に成長しうる性質のものである。コスタリカは私にとって今後も息の長い活動の場であり続けるだろう。

今回、同行した二宮知子は、私の作業を手伝う傍ら、綿密な写真記録を残してくれた。この報告書に収録したのは 3000 枚に及ぶ膨大な写真から抜粋したものである。
冒頭に記したように、制作を介した人間対人間の交流過程こそが重要である私にとって、これらの映像記録は大変貴重である。
また二宮知子はスペイン語の心得もあるので、地元の女性たちと一緒に料理をしたり、服装のセンスを刺激したりしながら、あっという間に打ち解けていた。まさに女性ならではのコミュニケーション能力である。彼女の介入によって現地の人たちとの間では笑いが絶えず、それがどんなに支えになっていたかわからない。

●コスタリカの風土

事前に耳にしていた評判に違わず、ここでは民主主義がどの国よりも根付いているように思える。まさに奇跡的である。
軍隊を持たず、無駄な道路工事をしないので、たとえ税収が少なくても、惜しみなく教育や医療、福祉に投入することができるのだろう。

人々の政治への関心は非常に高い。
一大学生が大統領を訴え、裁判に勝ち、国の方向を修正させた有名なエピソードが示すとおり、誰もが政治に関与し、国の形を自分たちで変えて行けるという確かな実感がある。
「無力感」に対する「有力感」とでも言おうか。
つまり社会と個人が乖離していない。
本来民主主義を標榜する国ならば当然持っているはずの「主権者としての自覚」だが、日本人の政治に対する無関心を見ればわかるように、世界の殆どの国の国民は政治に対して「無力感」しか感じられないのではないだろうか。
コスタリカでは、小学生のころから政治へ能動的に参加するようユニークな教育が行われていることは有名である。
それもさることながら、コスタリカでは政治システムをむやみに複雑にせず、シンプルにとどめる努力を続けてきたからこそ、人々はこの「有力感」を堅持できているのだろう。
そして人々は自分の国の政治体制を誇りにしている。

コスタリカの人は、豊かな自然、平和、平等、安全を守るためには、多少経済的な豊かさや効率を犠牲にすることも厭わないという矜持を誰もが持っている。

「コスタリカ神話は幻想だ」といったネガティヴな記事も事前に読んでいたのだが、実際に訪れて自分の目で見、感じた限り、私は否定的な要素にはほとんど出会わなかったのである。
そういうあら捜しをする論者とは、おそらくコスタリカの成功を面白く思っていない勢力、そして人々にその可能性を気づかせたくない勢力の側にいる人にちがいない。

コスタリカの人々には新しい異質な文化を寛容に受け入れる心のゆとりがあるとも思う。
その寛容さはどこに由来するのか？
国民は「あるがままの自然が基本的にすべての人の生命を守ってくれている」という実感の上に生活している。すべての人は生まれながらに十分豊かなのだと。彼らにとって自明なこの事実は、人生に不動の安心感を与え、心にヒューマニズムあふれる余裕を作る。
自称先進諸国に見られるように他者から搾取してまでも強迫的に物質的な豊かさを追求する価値観は彼らには理解できないであろう。
コスタリカの人は言うだろう。「なんでそこまで欲しがるの？あなたは十分すぎるほど所有しているのに」と。
所有が増えれば増えるほど人はそれを守ろうとし、引き換えに自由をいとも簡単に手放すのである。
だからコスタリカの人は身軽であることを美徳とし、それに不安を抱くことはない。

差別のない「多様性への寛容」は身近な熱帯雨林の多様性や高度な共生関係に日ごろ親しんでいるからでもあるだろう。
彼らの強みはなんと言っても、時間をかけることを厭わない気の長さである。
自然のゆっくりとした歩みと歩調を合わせているようにも感じた。

隙間の多い国

「Less is more」と言ったのは前世紀の建築家ミース・ファン・デル・ローエだった。
「より少ないことはより良いことである。」

しかしこの箴言はあまりにも安易に近代建築のミニマリズム翼賛へと利用され、商業的スローガンとして消費されてしまった。
建築の学生だったころは耳にタコができるほど耳にしたものだが、以来ついぞ聞かれなくなくなったこの言葉は、あらためてコスタリカの風土にこそふさわしいと思う。

モノを極力増やさない生活様式。
簡素な住宅工法。
小さい議会
最小限の法律
自然に極力手を加えず、あるがままの力を引き出すこと
学校、医療、ライフライン、交通など、きわめてシンプルな行政

なぜ少ないことはより良いのかというと、それはエコロジカルである以上に、人間の自由意志が働く余地が広がり、風通しが良くなるからに他ならない。
自称先進諸国で贅沢を味わった人は、エコロジーを“禁欲的”であるとし、敬遠する傾向にあるが、実は禁欲の対極にあるものなのである。
人が自由であろうとするならば、エコロジーを選択することは言わずもがなのことと言っても良い。
むしろ自由を奪われ禁欲的に生きているのは近代都市に生活する人々の方である。

隙間をいかに残しながらいかにして人は自然に手を加え、ともに生きていくか。
そのスタンスをコスタリカの人は本能的に知っているように感じる。

「ひまわりの塔」を面白がって簡単に建ててしまうこと自体が隙間の多さを物語っている。それどころか率先して火まで焚き、バーベキューを始めてしまうほどなのだから。
他の国ではこうはいかない。
やれ法律がどうとか、安全性をどう確保するかだとか、構造計算しろとか、消防法により数日で撤去せよとか、こんなささいなものさえ建てられないことを私はいやというほど経験している。

境界があいまいな未舗装の道路に、いかにも無造作に自動車を止めても誰も気にも留めない。小学生がバイクに乗って交番の前を通っても誰も関心を払わない。重要なことはほかにある。そんな日常である。

ゴミ問題

出会ったコスタリカ人に、こういう質問をぶつけてみた。
「コスタリカはあらゆる面で優れている。でもあえて欠点を挙げるとしたら何か？」
と。
その人は少し考えた後、「都市のゴミ問題かな」と答えた。
たしかに、コスタリカではゴミの分別はさほどされているわけではなく、プエルト・ヒメネス郊外でゴミをまとめて野焼きしている光景を見かけた。
まだ人口がそれほど多くはないので、深刻な問題にはなっていないのだろう。
まして、コスタリカの人々は極力モノを買わないので、当然ゴミもあまり出ない。
実際、路傍にゴミが無造作に捨てられていることもなく、他国の悲惨な実態に比べればはるかにましである。
今後コスタリカの人口が急増した場合、ゴミ問題は無視できなくなるだろう。そのときコスタリカの人々がどのように取り組むかが注目される。

サンホセ上空。殆どがトタン屋根。

トタン屋根

都市部から農村まで、ほとんどの家屋がトタンで葺かれている。
これだけは最後まで馴染めなかった。
どんなにインテリアに本物の素材が使われ、洒落た家具調度品が設えてあっても、上を見上げたときにトタンがあると興ざめしてしまう。
かつてはどの家も椰子の葉で屋根を葺いていたそうだが、ある大地震で壊滅したのだそうである。
トタンは安価で誰でも加工でき、椰子の葉の屋根よりは軽い。メンテナンスもそれほど大変ではない。ゆえに選択の余地がないのであろう。

今後、トタンが美しく見えるデザインが生まれるのだろうか？
あるいは、トタンを捨て、別の素材を発見するのだろうか？

竹資源の現状

竹を使った建築は、予想したほど多くはなかった。
エコロジーに徹底したホテルか移住者の家で見られた程度であった。
事前に得ていた情報では、コスタリカは難民を受け入れるため 1980 年代から国を挙げて竹を使った建築に取り組み、雇用と教育と住宅問題を一挙に解決したことが評価され、1998 年には HABITAT から賞を授与されたほどと聞いていたので、いささか拍子抜けの観があった。
どうも、そうした運動は受賞を機に、国からの支援は終わったようである。
またその国家政策は主にカリブ海沿岸地域で展開されていたので、オサ半島ではその痕跡すらなかった。
オサ半島では、いまだ「竹元年」と言えるのかもしれない。
これから草の根的な息の長い発展が期待される。またそうした方法によってのみ本物の文化は根付くであろう。

日記からの抜粋

以下、上記本文と重複する部分もあるが、現地で書いた日記からの抜粋を、断片的にだが付け加えよう。
カルチャーショックを受けたときの瑞々しい興奮を少しでもお伝えできればと思う。

●熱帯雨林の保水力

ちょうど季節は雨季で、毎日激しい夕立が起こり、朝まで降り続く。
日本ならばすぐに増水して洪水警報が出そうな勢いなのに、ここでは驚くべきことにどの川も一向に増水する気配がなく、明くる朝も車は何事もなく川を渡る。
おそるべし、熱帯雨林の保水力である。
緑のダムとは良く言ったものだ。
この季節は太陽が真上に来るというのに、日陰は涼しく、朝夕は寒いくらいである。

日本の川や海岸は徹底的に護岸工事され、地表は隈なくアスファルトで覆われ、冷房無しでは生活できない環境をみずから引き起こしている。
一種の暴走機関車に乗っていると言ってもいい。

政治においても自然においても、何も手を加えない方がはるかにましだという確信を深めた。

●モノを大切にするコスタリカ人

コスタリカの人はモノをとても大切にする。
そしてモノを極力買わない。

私は出国前に、必要な機材のリストを送った。
当然、一そろいの大工道具ぐらいはあるだろうと期待していた。
ところが結局、私は日本から持ってきた竹割り鉈と鋸だけですべての作業をすることになった。
ドリルビットでさえ、念のためと思い、日本から運んできたものを使った。
奇跡的にジグソーを持っている人に出会い、貸してもらったが、歯が欠けていて使い物にならない。

孟宗竹より肉厚で太い竹を 70 本、手鋸だけで切った。
テーブル・ソーがあれば半日で済む作業だが、これだけで数日を要した。

教訓。
時間をかけて出来ることならば、手間を惜しむな。
時はたっぷりある。タダだ。
モノは金なり。
効率追求は悪魔の誘惑。
節操の無い設備投資は自殺行為である。

お世話になっている農家では、1 台のクボタ・トラクタを 27 年間、大切に使っている。
クボタを崇拝している。これは壊れない！と。
クボタは孫子の代まで使える家宝となるであろう。

自分は気が長いほうだと思っていたが、完全に負けた。

修理中のクボタ・トラクタで収穫に向かう

●コスタリカの政治
国民は相手が大統領だろうがなんだろうが、批判すべきところは徹底的に批判する。
何を言っても全然かまわない。
みんなそう思っているし、裁判所も庶民の味方である。

政治家はパブリック・サーヴァントであるという認識が徹底しているのだろう。
つい先日も、大統領は貿易協定（TLC）導入の説明のためにこの村をふらりと訪れ､アルフレッドもそこに同席し、対等に議論したそうだ。
地方から中央に陳情に行く図式とは真反対である。

●コスタリカの冬
アルフレッドと話していてあれ？と思ったのだが、コスタリカは今が冬で、12 月から 3 月までが夏だという。
北半球なのにどういうことだろう？
よくよく確認したところ、乾季を夏と呼び、雨季を冬と呼ぶ習慣らしい。
夏より冬の方が気温が高くても関係ないようである。
どちらにせよ暑い。
乾燥している分だけ、乾季の方が快適である。
観光客も乾季にどっと押し寄せる。

赤道に近くなればなるほど、季節の分類は曖昧になる。
太陽の位置よりも、快適さを優先させて季節を大雑把に分けているのかもしれない。

コスタリカに来てから 1 ヶ月近くたつが、ほとんど毎日のように激しいスコールが訪れる。
10 月から 11 月が最も雨が降る季節だというから、推して知るべしである。

しかし、ハリケーンに見舞われることはほとんどないそうである。
コスタリカ近辺でハリケーンの種が生まれ、発達しながら北方へ移動するからだろう。

アルフレッドはスコールがいつ来るか、スコールがいつ上がるかを、匂いや風、雨音で的確に予言する。
彼はこんなことは誰でもわかると言うが、われわれから見れば超能力以外の何ものでもない。

●アリエラス
アルフレッドから面白い話を聞いた。

6 ヶ月に 1 度、アルフレッドの家を昆虫の大群が訪れ、そして去っていくという。

想像を絶する大群のようで、彼らが家を占拠する 2 時間は、床はもちろんのこと、壁や天井まで真っ黒になってしまうという。
その間はどんな人も、どんな動物もその場から逃げ出さざるえない。

色や形や大きさを聞くと蟻の一種にしか思えないのだが、アルフレッドは蟻ではないと言う。
その昆虫の名前は Arrieras(アリエラス)という。

最初は世にも恐ろしい昆虫の話かと思いきや、アリエラスはその短い占拠の間に、家の隅々までありとあらゆる害虫を一掃してくれるのだそうだ。
アリエラスは虫しか食べない。
家自体や家具、食器など人間の財産には全く危害を及ぼさず、家を勝手に掃除してくれるのだからこんなにありがたいことはない。
アルフレッドは彼らの到来を待ち望んでいるようだった。
まるで神からのご褒美のような昆虫である。

当然ながら、この昆虫は最大級に保護される対象になっている。

●コスタリカの行政
アルフレッドからコスタリカの行政サービスについていろいろ聞いてみた。

小学校は 6 年間で原則として午前中のみ。
アルフレッドの村では45 人の生徒に対し3 人の先生という割合だそうだ。
教師のほかに 5 人の役職がある。校長、秘書、副校長、経理、そしてもう一人は万が一他の役職が何らかの理由で欠員となった場合代理となるために常駐しているという。校長が教室で教えることはない。

セカンダリースクールはいわゆる中高一貫 6 年教育で、朝 7 時から午後 5 時までみっちり授業がある。学費はもちろん無料だが、若干の給食費だけを払う。
200 人の生徒に対し 10 人以上の教師がいる。

公教育では、どの地方でも平等に文部省の決めたカリキュラムを教える。
テストも頻繁にあるようだ。

大学受験のチャンスは 1 回きりである。
パスするのは 20%前後であるからかなりの難関である。

3 つの国立大学があり 5 年制である。学費は無料。
私立大学もいくつかあるがこちらは短期大学、単科大学といった位置づけらしい。

出会う子供は挨拶を大人同様に欠かさず、とても素直で大人の言うことを良くきく。
進学塾は無いわけではないそうだが、滞在している村では気配も無い。
小学生は、学校は午前中だけなので、午後は野山で泥だらけになって遊ぶ。
誰のお下がりか分からない自転車を、整備不良など全然気にもせずに子供たちは皆で共有しあって使っている。
同学年の女の子が歩いていると、男の子たちはさすがにラテン系で、ヒューヒューと口笛を吹いて美しさを褒め称える礼儀を忘れない。
ゲーム機で遊んでいる子供はついぞ見たことはないが、点々とある駄菓子屋のような店には必ず懐かしいスマートボールが数機置いてあり、大人や子供がたむろする「悪場所」となっている。

アルフレッドの次男は、小学生でありながら耕運機を操り、オイルパームの収穫などでは大活躍である。

オイル・パームの収穫

自動車の運転も既に習っているようだ。バッテリー不全の自動車を押しがけして発動させることさえやってのけたのには驚いた。

彼は、普段からすすんで大人の仕事の手伝っているのだろう、言葉は全然通じないのに、私が何をしようとしているのか察知し、気が利いた手助けをしてくれ る。その落ち着き払った所作は一人前の大人の風格である。ロープを縛る技術も一通り習得し、応用もしているようだ。そうかと思うと次の瞬間にはお母さんに甘えて駄々をこねたりするのである。

自営で農業を営むアルフレッドの家では、5 人家族で月 2000 円の社会保険を払えば医療費は無料である。
この国では、たとえ外国人労働者であっても、お金のない人から医療費は取らないそうである。
少ない負担でここまでの福祉、教育行政が実現しているのは、税金を軍備や無駄な道路工事、原子力発電、政治家のパーティー券や政党助成金などに使っていないからだろう。

上水道は場所によって必ずしも利用できるわけではないが、引ける場合は 5000 円ほどの初期費用がかかり、月 200 円で 30 立方メートルまで使える。
下水の行政サービスはなく、各自トイレの水は浄化槽で、生活汚水は砂利や砂でろ過させて流している。
アルフレッドの近辺は家がまばらで、100㎥ 四方に数軒というのどかなところなので、都市部はどうなっているかはわからない。

ゴミはビールの缶やペットボトル、ビン、レジ袋など結構出ている。それらを分別せずに黒いゴミ袋に入れて、公共ゴミ処理サービスに出している。
人口が少ないからまだ問題にはならないのかもしれない。

アルフレッドの母親は 1 歳のときパナマからコスタリカへ移住してきた。
未だパナマ国籍である。
現大統領は月あたり約 1 万円の年金を国籍を問わず定住している老人に平等に支給している。1 万円あれば一人が食べていくには十分だとのこと。

近くの海で魚や貝や海老は採り放題であり、たとえ現金収入がなくても餓えることはない。椰子の実も一年中実っている。

このように自然資源に恵まれ、基本的に豊かならば、人々はそんなに働かなくてもよさそうに思えるが、この国の男性は非常に良く働く。
朝 6 時から午後 3 時までが標準の労働時間のようだ。
シエスタは特に無い。
アルフレッドの場合は毎日朝 5 時から休日返上で働いている。
労働は食うための労働ではなく、生きがいや夢なのであろう。
「基本的に生きていける」という自信はこのように人を能動的にさせる。
労働＝ボーナスなのであろう。
そうして得られた収入の一部を、貧しい人を助けることに使うことは全然苦ではないとアルフレッドは言った。
人々は皆楽観的である。

●コスタリカと日本の道具

コスタリカの現実に触れるほどに、日本の茶番政治や土建屋主導の都市計画、刹那的流行、いじめ社会、悲壮な労働環境など、なんでこうなるのと、どんよりとした気分になるばかりだ。

だが、コスタリカで発見する好ましき日本もある。

アルフレッドがクボタ耕運機を家宝にしていたように、コスタリカにおける日本製品への信頼は非常に高い。
電動工具はマキタ。自転車はシマノ。自動車はトヨタ、スズキ、イスズ。バイクはホンダ、ヤマハ。オーディオはソニー、パナソニックが席巻している。
彼らはそれらの道具を壊れるまで、というよりも、壊れても使っている。
余談だが、かくいう私もソニーのトランジスタ・ラジオを 30 年以上愛用している。
このラジオはすごい。
実は数ヶ月前に、このラジオを聞きながら屋根に登って作業していたところ、誤ってアスファルト道路に落としてしまった。
ついに壊してしまったかと思いきや、少しへこんだだけで今も何の問題も無く作動している。
こんな丈夫な電化製品がほかにあるだろうか？音質も感度も燃費（電池のもち）もいい。
ちなみにこの旅行にも携帯している。
ラジオはソニーにかぎる。
ソニーはアイポッドやアシモなどの後を追うよりも、この創業時以来の基本路線を守ってほしいものだ。

コスタリカの人は誰もがトヨタを絶賛する。
トヨタといってももちろんプリウスのような高級車ではなく、四輪駆動オフロード・マニュアル車である。
余計なアクセサリ（電気設備）が無ければ無いほど好まれる。
単純なものほど壊れにくいし､修理しやすいからである。
パワーウインドウなどはもってのほかである。橋の無い川を渡るときに命取りになりかねないからである。
ガソリン代が高く、悪路の多いこの国では、自動車の耐久性と燃費が最優先される。
コスタリカはいわば世界最強の車を選抜する公開実地試験場のようなものである。
その厳しい淘汰の末に日本車が圧倒的シェアを占めている事実は製造業冥利に尽きるといえるのではないだろうか。いいものを作れば、政治介入や派手な宣伝などしなくても、人々に広く受け入れられるものである。
トヨタも環境にやさしいかどうかはなはだ怪しい燃料電池車などに社運をかけるよりも、このような長持ちする自動車を地道に作り、無期限のアフターサービスに徹してもらいたいものだ｡それが何よりのエコロジーであり、おそらく真っ当な社会的使命である。

大工道具などのいわゆる「鉄器」も日本製が大変評価されている。
そういえばニュージーランドの大工さんも日本製の刃物やハンマーを持つことをステイタス・シンボルにしていたものだ。

国際的に評価される日本文化として寿司や漫画やゲームばかりが脚光を浴びがちだが､「すぐれた道具」こそが日本の底力という気がする。
大工道具から日本車まで、そのクオリティの高さは、おそらく江戸時代から連綿と続く頑固な職人精神に支えられてのことだろう。

いっぽうコスタリカにはコスタリカの注目すべき道具がある。
刃渡り 60 センチほどの大鉈で「Machete（マチェテ）」という。

これは中米で普遍的に使われているナイフで、エルサルバドル製が定番だそうだ。
一説ではマヤ起源の剣だとのことである。
アルフレッドたちも、日常の作業はほとんどこれ１本で済ませている。ジャングルの藪を切り開いたり、木を切り倒したり、ココナッツを割ったり、蛇から身を守ったり、いわゆる万能ナイフである。
男はみなこれを腰に下げて仕事に出かける。
熱帯雨林を案内してくれた現地の人も、この大鉈で道を切り開きながら先へ進むのだが、そのとき鳴り響くシャキーン、シャッキーンという音がなんとも心地いい。
いろいろな幅や長さのマチェテがどの町のハードウエア・ショップでも手に入る。
高価なものと思いきや、立派なものでも１本 300 円もしないという驚くべき安さである。
このことはこの大鉈がいかに生活に密着しているかを示している。
どの国でもそうだが、生活必需品は安いものだ。その国の価値観を知る手っ取り早い方法は、スーパーへ行って異常な安さの物を見つけることである。チューリッヒは世界で最も物価が高い都市だが、それでもチョコレートだけは安かった。

売られているマチェテは刃が未仕上げのままで、すぐに使うことはできない。
自分の手でせっせと磨ぎださなくてはならない。長さが長さだけに大変だが、それもよきかな。
牛皮製の鞘もなかなか装飾的で私はとても気に入った。

嬉しいことに、ここでの制作活動のご褒美として、地元の皆さんの厚意で典型的なマチェテを一本いただいた。
私もコスタリカの男として認められたということだろうか。
返礼に、日本から持参した竹割り鉈と竹引き鋸を差し上げた次第である。

●コスタリカの交通と税制

コスタリカ国産のビールは安くておいしい。Imperial が一番人気で 500ml 150 円。
ワインはチリやアルゼンチンからの輸入なので比較的高く、相場は日本とほぼ同じ。
コスタリカでは輸入品は何でも高い。関税をしっかりかけているのだろう。
ガソリンやプロパンガスも輸入なので日本とほぼ同じ値段のようだ。

電気は自国の水力発電でまかなわれ、電気代は安いという。
電気を節約する習慣は意外にもあまりみられない。
みな長電話をしているところからすると、電話料金も安いのかもしれない。（帰国後調べたところでは 10 分 1 円ほどである）
国産の食料は安く、日本の物価のおよそ 1/2 に感じる。

バスは民間なのに安い。
車体は古いベンツで、煙をもくもく吐きながら走る。
南米からの払い下げを使っているらしい。
バスを一度だけ利用したが、1 時間乗っておよそ 100 円だった。
10 時間乗って 1000 円ほどだというから、だいたい距離に比例しているのかもしれない。

車内は意外に涼しくておどろいた。
前後のドアが開けっ放しであるから、冷房をきかせているとも思えないのだが。
バスには運転手と車掌に加えてもう一人なぜか関係者が乗っていて、これではとても採算が合うとは思えないのだが、これもワーキングシェアの一種だろうか。

バス会社は国営郵便局を差し置いて、物流（宅配）の副業もしている。
配達の仕方を見ていると、どう見ても非公式であり、個人的な信用を前提に営業を続けているとしか思えない。
日本の田舎のバス同様に、声をかければどこでも乗り降りすることができる。

その日、たまたま鉄橋の一部が崩落していた。乗客は一端バスを降りて向こう岸に徒歩で渡らなければならなかった。
対岸には別のバスが待っていた。
こうしたアクシデントは日常茶飯事らしい。
大抵の橋には多かれ少なかれ穴が開いていて、自動車は勢いを付けて渡らないと足をとられる。
道路はすぐにでこぼこになるので定期的に川砂利を敷きなおさなければならない。
ところがこの作業自体がリスキーで、砂利を運ぶ大型トラックが立ち往生して道路を塞ぐ状況に何度となく遭遇した。
そんなときもコスタリカの人はイライラせず、初めて会った同じ境遇の人たちとのんびり世間話をしながら開通するのを待つのである。

コスタリカの税制についてアルフレッドから聞いた情報は以下のとおりである。

年収 5000 ドル以下の収入の人は無税。

消費税は一部の商品のみにかかる
もちろん生活必需品にはかからない。
電化製品や自動車などの贅沢品にかかる税金はかなり高い。
カフェやレストランには神棚のような場所にソニー製のテレビやステレオが置かれ、しかも鉄製の檻に入れ南京

錠と鎖で盗難防止する徹底ぶりである。
自動車の場合、税率はなんと 100%だという。
日本のタバコなみである。
車検制度は特に無いようである。

国営銀行が地方の隅々まで張り巡らされており、24 時間営業である。
もちろん国内筆頭の巨大バンクである。
雇用者は日雇いに対する報酬でさえ、いちいち伝票で労働者に支払う。
小切手ではなくあくまでも藁半紙の「伝票」である。
労働者はそれを持って最寄りのナショナルバンクへ出向き、現金を受け取る。
町はずれの人々にとっては、伝票を現金に替えに行くのも半日仕事だろうが、皆少しおしゃれをし、街でささやかな贅沢をして来るのであろう。
このように国営銀行が出口をおさえていれば、お金の流れを把握するのも簡単だろう。
国営銀行は個人に貸し付けもしてくれるらしい。
紙幣はまるで洗濯していない着古したジーンズのように、ぼろぼろで少し湿っており印刷もかすれているが、社会の血液として立派に機能している。
コスタリカのお金を使うときに「コスタリカ社会に参画しているな」という実感が特に強く感じられるのは、あながち幻想ではない。この感覚は、投機行為が主要産業となりつつある近代国家ではほとんど忘れ去られつつあるものだ。

年金制度についてもアルフレッドにしつこく聞いたのだが、どうも質問の意図すら伝わらないことからして「かけ金」という概念がないのかもしれない。
税金、あるいはソーシャル・セキュリティーだけで福祉は十分まかなわれているのかもしれない。

JAPANFOUNDATION

friends of the osa